

# 学研労協 NEWS ニュース

## 12.8 不戦のつどい開催

つくば地区における「12.8 不戦のつどい」は、太平洋戦争が始まったとされる12月8日にちなんで毎年開催されてきました。これまで戦時中の人々の暮らしがどうだったか、戦地でどんなことが起きたか、特攻兵器の操縦訓練の体験談などを聞く機会としてきました。

戦争が起きたとき、その戦争に巻き込まれた人々がどれほど悲惨な生活を強いられるかは、実際に起きたことから学ぶほかありません。その一方、これまでに起きた戦争はそれぞれ独自の背景をもち独自の経過をたどりました。それゆえ、過去の戦争の歴史を学んでも、これから起きるかもしれない戦争がどのようなものになるか予想できません。だからと言って、歴史を学んでも将来の役に立たないわけではありません。国家の名の下に一部の権力者の決断によって始められた戦争は必ずその国と相手国のあらゆる国民に甚大な影響をもたらします。そのような歴史の事実からくみ取った教訓を、平和を維持するための不断の実践の糧とすることが求められています。

今年の12.8 不戦のつどいは、12月17日（土）にゆかりの森・老人福祉センターとよさとで開催されました。今回は茨城県の県庁所在地が1945年8月2日に焼け野原にされてしまった「水戸空襲」に焦点を当てて、水戸市が1995年に作成したドキュメンタリー「戦禍を見つめた木—50年目の証言」および戦争の紙芝居「ある紙芝居屋の物語—それでも黄金バットはやってくる」を鑑賞しました。紙芝居は「次世代に伝えたい朗読と紙芝居のオリーブ」のメンバー4人により上演されました。

ドキュメンタリーの題名の戦禍を見つめた木とは、水戸駅から京成デパート方面に伸びる広い道路の「银杏坂」の名前の由来になったイチョウの大木です。水戸空襲で焼け野原になってしまった水戸の街とその中で焼け残った大木の姿そして、そこからの復興を描いたドキュメンタリーです。今年の紙芝居は、今年の不戦のつどいで上演された「茂木貞夫物語」とともに茨大の紙芝居

研究会の学生たちが作成した「戦争の紙芝居3部作」をなす作品です。心優しい紙芝居屋の「おじさん」が戦争の時代の空気の中で苦悩する姿を描き、平和の尊さを伝える紙芝居です。「おじさん」にとって大切な紙芝居屋という仕事は、戦時下では続けられませんでした。戦争によって「おじさん」の労働条件は奪われました。平和は重要な労働条件なのです。

